

第 1 回四万十市立小中学校再編検討委員会における意見要約

平成 28 年 9 月 29 日
第 2 回 検 討 委 員 会

学校再編に対する考え方（必要性・意義・効果）

- 以前利岡も統合の話があり、当時は反対の立場でしたが、P T A 活動をしていく中で、大規模な学校で勉強させるのもいいのかなという気持ちもある。
- 常六小学校で児童数 9 名という経験をしたが、人数が少ないから子どもたちに十分な教育ができないということはないと思う。統合しないと教育は成り立たないということはないと思う。
- 2～3 人になったとき、そこで一生懸命学んでも結局、外（そと）のことがよくわからない。実際外（そと）に出たときに困るし、人数の関係でクラブ活動もできなくなったときに、素晴らしい素質を持った子どもが、そこで止まってしまうこともあると思う。また、バス通学は身体にも無理がいくが、それが身になっていくと思う。それらのことから、子どもたちの将来のためには統合の方がいいと思う。
- 中学校 4 校区と同じように小学校も考えなければならないと思う。
- 竹屋敷の例では、統合時は、静かな性格で自分がいじめられていると感じてしまうような子がいたが、今では立派な社会人になっている。

考慮すべき事項

- 統合には必ずメリット、デメリットがあると思うが、そういったことを総合的に考えながら将来的なビジョンを考えていく必要がある。
- 統合したあと、何年後かに、またその学校の名前があがってくるようでは地域もいろいろと不満も出てくる。
- 今後、耐震補強とかやらなくてはいけない施設があると思うが、予算を投資したあと、その学校が廃校になるとか、そういうことにならないように整備計画と再編を考えていかなければならない。
- 今後の耐震等への取組みは、大川筋中学校については、今年度、耐震補強という形で実施している。大用中学校の体育館は、今年度設計をして、来年度改築する準備をしている。これで耐震は一定目途がつく。今後は、東山小、具同小、南小などの大規模改修の計画があるが、経費と再編計画をあわせながら大規模改修の計画を考えていかなければならないと考えている。

- これからの検討は、子どもたちのこと、地域のこと、財政のこと、それらをどう組み合わせるかで考えていくかということになると思う。
- 急に大規模になると、やっていけない子どもが出てくる。4校区にするのもいいが、子どものメンタルケアもできるよう、①集団生活ができない子どもを受け入れる学校、②小中一貫教育ができる学校、③大規模で編成し競争していく学校など、いろんな特色を考えながら、みんなに選んでもらえる学校の編成を考えていけば納得していただけると思う。
- 学校というものは学力だけではない。社会に出ていく力を養ううえで、なかには競う方がいい子どももいれば、そうでない子どももいる、そういった現状も柔軟に取り入れて検討していきたい。

児童生徒数減少の要因等

- 中学生の生徒数の減少は、県立中学校への進学も影響しているのではないかと。
- 本市の場合、約20%から30%が県立中学校へ入学している状況。今年度、県立中学校に入学した70名のうち47名が本市の小学校卒業生である。
- 例えば、小学校6学年で女の子が2人の場合、女の子1人が県立中学校を受験したら、もう1人の女の子も受験するという話も学校訪問などで聞く。
- 東中筋小中の児童生徒数は激減する見込みとのこと。雇用促進住宅が何年後にはなくなるとか、そういう噂が影響していると思う。
- 児童生徒数の減には、いろんな要因があると思う。

特認校制度・指定校変更等について

- 特認校制度ですが、これまで制度を利用された子どもさんがいるか。特認校が大用小学校と川登小学校になった経緯は。
- 正確ではないが、統合が契機であると記憶している。
- 過去、大用小に2～3人いたということは聞いている。制度は16年度にスタートしているが、2校を指定した理由は、把握していない。
- 岩田団地は本来なら利岡小、後川中が校区になるが、簡単に中村小に就学できている現状がある。学校が違うことで地域活動にも影響が出ていると思う。
- 一部は中村区域（住居表示）ですので、今のような状況になっていると記憶している。

統合に向けた学校間の事前交流等

- 当事者である子どもの「心の統合」がない場合、統合後にいろんな問題が生じているとの報告も聞く。そういう子どものメンタル部分の統合の取組みも考える必要がある。
- 統合の前に如何に子どもたちの心を統合していくかということが、現場としては非常に大きな問題。時間に余裕をもって、子どもたちも統合に馴染んでいく、集団として育っていく、そういうことを考える必要がある。
- 統合後よりも、統合に向けた子どもたちに対する取組みが必要だと思う。
- 新しい建物に、複数の学校から新しく入り統合する場合は、そこまでにしっかり準備をしておかないと難しい面もあると思う。(清水中学校・大月中の例の説明あり)
- 他市の例では、各地区で遊びのルール(鬼ごっこの例の説明あり)が違うが、急にそれが一緒になったことで仲が悪くなり、先生の言うことも聞かなくなったという話も聞く。最初から統合に向けた心のケアは大事だと思う。
- 私は小学校が分校で、分校が本校に統合するときの卒業生でしたが、体育であるとか大人数の方が楽しい教科のときに本校から来てくれていたので、割とスムーズに大きな中学校に入ることができた。
- お互いの学校が1か月に1回、2カ月に1回交流できるようにして、友達になれるような取組みをしておけば、統合してもあまり抵抗がないのではないか。そういうことも大事と思う。
- 子どもを中心に考えた場合、通学の問題、部活の問題などいろんな課題が出てくる。そこも一つ一つ検討すべきだと思う。統合に向けた取組みについても、議論していきたい。

保護者・地域への対応について

- 保護者や地域への対応も大事と思う。竹屋敷の例では、「学校がなくなると寂れる」という傾向が全国的にあったこともあり、反対する人はいたが、話し合いをしていくうちに、やっぱり子どもたちのためを思うと統合した方がいいのではないかという声が多くなった。
- 大用でも統合の話になると、なんとか残してもらいたいとIターン対策にも取り組んでいるし、環境も良い。いろんな課題を解決し、統合に向けていけるようにするには時間がかかると思う。

その他

- そこに住んでいる人たちへの説明、納得、そこが一番大切だと思うが、その前段として、この検討会である程度の目標を設定していくということか。
- この会としては現状を分析して、あるべき姿について議論をして教育長に答申する。そのあと教育委員会が答申に基づき、また地域の意見も聴きながら計画策定を進めていくという流れになる。

- （平成15年度の統合時の片魚小学校の事例をもとに）密着した教育という面では小規模もいいかもしれないが、集団という面から考えるとどうか、そこをどう折り合いをつけていくのが今後の検討項目の一つになると思う。
また、地域も手をあげて賛成ということは、たぶんあり得ないと思う。

- 平成20年の計画書（骨子）では、「中学校区を4校区程度」とありますが、区割りはどうなるのか、程度というのは3校区もあり得るのか。
- 1校区は西土佐、あとの3校区は具体的にどこにするかは定かではない。

- キーワードとしては、複式の解消などになると思う。中学校の複式においては、教科の問題などの課題があると思うがどうか。
- 中学校の場合、複式が1つできると2学年となる。3学年ある場合は校長、教員で9名配置されますが、2学年になると6名となる。現在2学級（2学年）の学校は、大川筋中と中筋中で、教員はそれぞれ6名。その中で、9教科教える必要があるが、5教科については免許所有者を配置し、音楽、美術、体育などの教科については、隣の学校と兼務という形で対応している。兼務校両方において負担がかかっている状況。

- 学校現場の事情など、わからないことがあれば先生方や事務局に確認しながら次回以降、検討を進めていきたい。